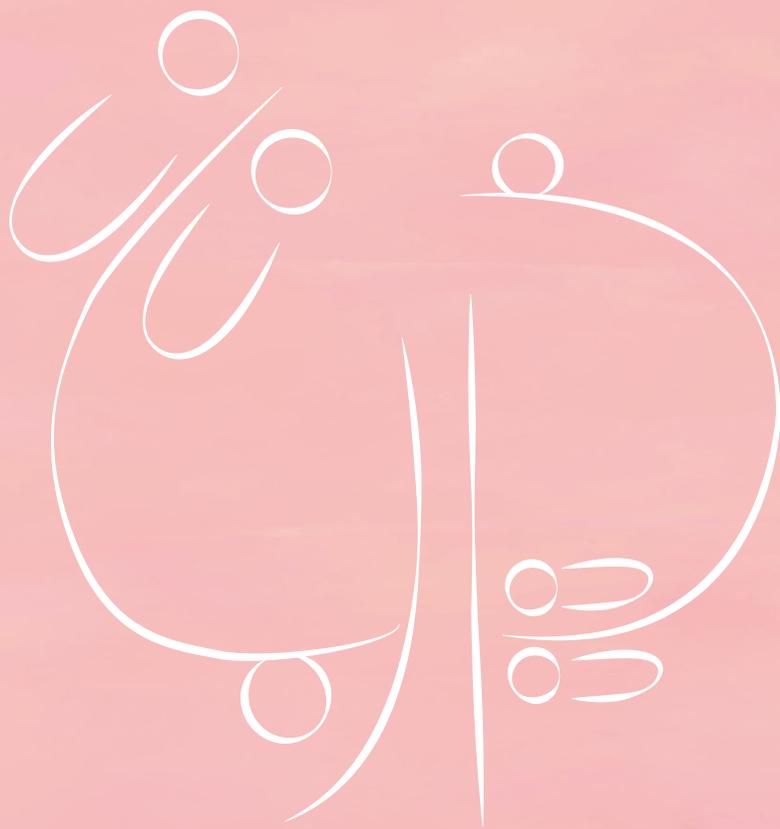


子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

# 文化高知

2023年1月 NO.229



[もくじ]

- 2～3 職業:土佐和紙インターフェース…一宮佳世子
- 4～5 イライラと向き合おう…日比野桂
- 6～7 戯曲を書く、ということ…やまもとあや
- 8～9 こんな本を売っていいんだろうかという恐い小説がこの世にはある…山中由貴
- 10 アーティストインレジデンス…岡村聡徳
- 11 「アンテナ」劇団野らぼう 高知公演…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団10～11月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

# 職業…土佐和紙インターフェース

## 一宮 佳世子

職業を聞かれると何と答えたらよいのか、いつも答えに困ります。紙の町・いの町にルーツを持つ

筆者の実家は昭和のはじめより横浜市で和紙の輸出問屋を営んでいました。物心ついた頃から紙が大好きで、幸い紙だけは身近にたくさんあったので、見本帳の裁ち落としや半端な紙をもらっては紙とハサミと糊で何かを作って遊んでいる子供でした。今にして思えば紙本保存修復という仕事をすることはこの頃に決まっていたのかもかもしれません。

とはいえ、初めから紙本保存修復家を目指していたわけではありませんが、学生時代は自分が何をしたいのかわからないまま何となく就職活動をして、運よく東京の紙の商社に就職が決まり、洋紙の原料となるパルプや古紙を輸

入する部門に配属となり、私の紙人生のキャリアがスタートしました。

留学資金ができたので数年で会社を辞めアメリカで再び大学生となり、その後カナダの紙会社で作業の出向社員兼現地スタッフとして仕事に就きました。和紙を専門に扱うその会社には芸術家やデザイナー、保存修復家など、スタッフもお客さんもすべて紙が好きな人たちのたまり場となっていたので、とても居心地の良い楽しい職場でした。書道用紙や障子紙などといった日本の用途の概念のない海外のユーザーたちにとって和紙とは純粹に「潜在的な可能性無限に持つ万能な素材」として高く評価され、自由な発想で様々な用途に使われていることがとても新鮮に映りました。

ある時一人の芸術家に「和紙は千年以上も前と同じ原料からほぼ同じ製法で作られ、しかも今も産業として成り立ちながら昔のままの姿で残っている。それは本当にすごいことだ。そんな悠久のロマンスを秘めた素材が二十一世紀になろうとしている今、日本を遠く離れたこの国で自分にも買えるような金額で手に入るなんてまさに奇跡だ！ 伝統を受け継いでそれを可能にしてくれている和紙職人たちに心から感謝している」と言われ、その言葉を聞いて初めてその事実が気付き、和紙が褒められて嬉しい反面、気付いていなかった自分を恥ずかしく思いました。

三年ほど続いたカナダでの生活もビザの関係で終わりに近づき、紙を売るには紙のことをもっと知る必要があるということで、帰国

してすぐに高知に住まいを移しました。

リモートで家業を手伝う傍ら、当時高知市の旭町にあった高知県紙業試験場やオーブンしたての土佐和紙工芸村で後継者育成プログラムの研修生となり、「作り手」の立場で紙を学ぶ機会を得ました。手漉き和紙職人を目指して日々頑張る仲間たちと共に時を過ごしながら、彼らの紙を市場に出さねばという思いがより強くなりました。そして「使い手」の気持ちかわかればもっと和紙の需要を伸ばすことができるのではないかと考え、頭に浮かんだのが以前から興味があった紙本保存修復でした。

その頃すでに三十代後半になっていましたが、紙に特化した保存修復が三年間で学べるといふ専門学校が存在を知り、思い切って門を叩いてみたのでした。卒業後は図書館や公的機関で実際の現場を渡り歩きながら経験を積み、フリーとなつて現在に至ります。

保存修復はコンサベーションという言葉のとおり保存や維持・管理という意味合いで、そこには文化財の長期保存と維持のために行う教育研究、記録、治療、予防ケ

アのすべてが含まれています。紙の劣化要因を取り除き寿命を延ばして後世に伝えるお手伝いが紙本保存修復家（ペーパー・コンサバター）のお仕事です。

ただ汚れをとって破れを治して丈夫にすればいいというのではなく、「修復とはオリジナル性の破壊である」ということを心にとめ、原型の持つ情報をなるべく失わなような手段で作業をすすめます。

例えば仮に作品の横に鉛筆で落書きがあったとして、単に持ち主の子供がうっかり書いたものでそれが鑑賞の妨げとなっているならば除去してもよい落書きですが、作家本人によるものだったり、落書きをした子供がのちに特別な人物になっていたりした場合はストーリーが付いて意味が変わってくるので、処置の方針がガラリと変わります。作業の際には「作品や資料に手を入れることがそれだけ畏れ多いことなのだ」という謙虚な気持ちで向き合うよう心がけています。

ひと言で紙本保存修復家と言ってもその実は、絵描きや美術・歴史の研究者、美術愛好家、生物・化学の研究者、薬剤師、司書など、

異なる専門分野を持つ紙好き人間の集りです。各人の持つ情報や知識は惜しみなく公開・共有し、業界に貢献することが文化財のためにとても重要だとされています。筆者の場合は、紙本保存修復家という紙の使い手の立場にいながら作り手の和紙職人の側にも立てる紙屋として、産地からの情報を現場の仲間たちに発信したり、反対に保存修復の現場の様子を和紙職人に伝えて要望にかなった補修紙を開発したり、口幅った言い方ですが双方の橋渡しができるユニークな位置に立っています。

さて、和紙が保存修復に欠かれない材料であるというのは周知の事実ですが、その理由に次の七つが挙げられます。①親和性が高く、色々な素材によく馴染む②容易に成形ができ、柔らかく作業性が良い③透明性がある④折り曲げに強い⑤化学的に安定している⑥文化財や人体、環境に対して安全である⑦比較的安価で入手しやすい。また、でんぷん糊と和紙の組み合わせによる修理の安定性は何より長年の歴史が証明しており、湿らせば簡単に剥がれるのでいつでもオリジナルを痛めずに元の状態に

戻せるという可逆性もまた大きな理由です。

高知がこのような唯一無二の素晴らしい素材の主要産地であることは保存修復業界ではあまりにも有名な話で、毎年国内外から数多くの保存修復家たちがこぞってこの聖地を訪れています。にもかかわらず、県内ではほとんどその用途に使われていないのが現状です。保存修復用の高品質な土佐和紙が遺産ではなく今後も生きた産業として成り立つよう、もっと積極的に、そして継続的に消費できるような場が、高知県内にもこの先できることを願ってやみません。

いちのみや かよこ

紙本保存修復家  
株式会社ペーパーワン（和紙・文化財保存修復用品販売）  
いの町紙の博物館非常勤職員  
NPO地域文化計画会員  
NPO文化財保存支援機構会員  
和紙文化研究会所属

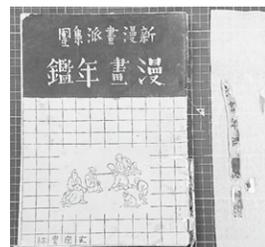
## 紙本保存修復作業の一例



文化財修復用品質の和紙（楮紙）とデンプン糊（小麦澱粉100%）を使用した欠損・破損部分の修理と補強



汚れ除去の方法のひとつ、水酸化カルシウム水溶液に浸す水性洗浄



修復前に資料の状態の調査と記録を行い、作業方針を決める

※写真は筆者が行った横山隆一記念まんが館蔵『新漫画派集団 漫画年鑑』の保存修復作業報告書より引用

# イライラと向き合おう

日比野 桂

朝起きたら頭が痛くてイライラ。急いでいるときほど赤信号に引っかけたてイライラ。子どもが遊んでばかりで話も聞かずにイライラ。買い物に行ってもお目当てのものがなくてイライラ……。私たちは案外、ふとしたきっかけでイライラ、つまり怒りを感じているようです。そしていろいろな相手に対して怒りを感じるものが分かっていきます。さて一番怒りを感じる相手は誰だと思えますか？

調べてみると、普段の生活の中で怒りを感じるのは友達や家族、仕事の同僚など身近な人物が多く、初対面の人には怒りを感じることが少ない（ないとは言いま

せんよ！）ようです。では、なぜ身近な人の方が多いのでしょうか。会う回数が多いから必然的に怒りを感じる人が多いというのは当然として、他にも理由があります。私たちは身近な良く知っている人達に対して、無意識に「この人は私のことを理解しているから、私のことを考えて行動してくれるだろう」といった期待をしています。

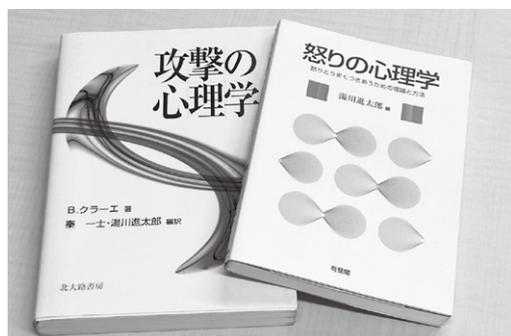
例えば、トマトが苦手な人は友達が盛り付けてくれたサラダにはトマトが入っていないと考えがちです。友達は私がトマトを苦手なのを知っているはずだからです。ですので、トマト入りのサラダを渡されると「トマトが苦手なのを

知っているはずなのに!!」と怒り出してしまいます。友達だからといって好き嫌いまで全て覚えているとは限らないのに、つい無意識に期待をしてしまうというわけです。このような無意識の期待は初対面の人には抱きません。初対面の人は私がトマトを苦手だと知らないため、例えばトマトたっぷりパスタを勧められても怒りを感じる

ことがないわけです。あとやっぱ身近な人の方が、素の自分を出しやすいですよ。だから怒りを感じることを我慢せず、身近な人に怒りを感じやすいという風になるわけです。

さて怒りを感じたあと、その怒

りはどうなっていくのでしょうか？ いつまでもイライラが残ってしまうこともあります。多くの場合、例えば強い怒りを感じても、いつの間にかその怒りは和らいで無くなってしまう。もちろん、ふと思いついたり同じことが起こったりで再び怒りを感じることもありますが。では、怒りはどのように和らいでいくのでしょうか。さきほど、怒りを感じる相手は身近な人が多いと書きましたが、身近な人に怒りを感じるといふことは「怒りを感じた相手とどのよう



「怒り」に関する心理学の図書の一例。「怒りの心理学」(湯川進太郎 編) では筆者も執筆している。

が重要なポイントになりますよね。怒りを感じた相手との関係は必ず悪化するとは限りません。「雨降って地固まる」と言うように、とある調査によると、怒りを感じることで相手とより仲良くなったと報告する人が一定数いることが示されています。では、怒りを感じたときはどうしたらいいでしょうか。

まず、もし相手に強い怒りを感じている場合は、その感じている怒りを和らげることが重要です。数を数えるでもいいですし、な

んならその場から立ち去ってもかまいません。強い怒りを感じていると、つい攻撃的に振る舞ってしまいがちです。攻撃的に振る舞うと自分の気持ちはスッキリするかもしれませんが、何の解決にもなりません。怒りを感じたときに大事なものは、ある程度自分の気持ちを落ち着けることなのです。



高知大学の心理学実験室。対象の心理状態が余分な情報に左右されないよう、シンプルな空間になっている。

そのように怒りが少し和らいだ後は、ぜひ怒りを感じた人と会って話をしてみましよう。その中で自分の気持ちを伝えたり相手の意図を確認したりしてください。もしかししたら、思い違いをしている部分もあるかもしれませんし、自分にも責任があったかもしれませんが、相手と会って話したり自分の怒りを伝えたりすることが、今後の相手との関係をより良いものに繋げてくれるのです。

逆に、まったく見知らぬ人に怒りを感じた場合はどうしたらいい

でしょうか。相手が見知らぬ人の場合、怒りを感じた相手と仲良くなることも、もう一度会って話ができる可能性もあまりありません。だからといって、怒りをそのままにしておくと知らず知らずのうちに溜め込んでしまうことになりま

す。怒りを感じるということは不快な経験をしたということです。怒りを感じること自体も不快なことなので、自分の怒りに向き合っただけで、自分の怒りに向き合っただけで済ませず、つい後回しにしたり避けてしまったりしがちです。ですが、怒りを溜め込みすぎてしまうと、心身に不調をきたしたり、いつか爆発したりしてしまうかもしれません。ですので、見知らぬ人に怒りを感じた場合も、自分で自分の怒りと向き合っただけで済ませず、「相手は消す必要があります。相手はとも急いでいて自分に気づいていなかった」など、自分なりに納得できるような何らかの理由を考えてみましょう。

最後に、怒るということは「自分のテリトリーを侵すもの」に対

応するための名残でもあります。そのため怒りを感じると交感神経が強く働き、素早く体を動かせるように心拍数と血圧が上がります。怒ってばかりいると常に興奮状態というわけです。そのため、怒ることが多いと心筋梗塞になりやすいと言われています。普段からイライラしがちな方、お気をつけて（自戒を込めて）。

\*写真の図書

〔右〕湯川進太郎 編

『怒りの心理学―怒りとうまくつきあうための理論と方法』（有斐閣）

〔左〕B・クラエ 著

秦一士・湯川進太郎 編訳

『攻撃の心理学』（北大路書房）

## ひびの けい

一九七七年 静岡県生まれ。

高知大学人文社会科学部准教授。

専門は感情心理学。

# 戯曲を書く、とついでに

やまもと あや

はじめて戯曲を書いたのは高校二年の夏だった。秋に控えた高知県高等学校演劇コンクール。どうしても勝ちたかった。あの頃の私は負けず嫌いだった。

公演はしたが、台本がなかなか見つからない。というのは、演劇をしていたら誰もが一度は通る道ではないだろうか。(と勝手に思っている。) 戯曲は星の数ほどあるけれど、人数があわない、上演時間が長すぎる、こんな舞台美術作れる気がしない……。さあ、それらはクリアしたけれど、うーんこのストーリー、私たちがやりたいものじゃない気がする……。よし。じゃあ、自分で書けばいいじゃないか！(これもまた、お決まりの展開だ。)

妥協で選んだ戯曲では勝てない。私を書くしかない。

いったいなんの使命感。しかしその使命感はともひっそりとしたもので、演劇部の部員にも言わず、こそこそ戯曲を書いていた。負けず嫌いだが小心者。そして、コンクールの台本選び、という段で「実は……」と書いてきたものを出した。みんな快くやろうやろうと言ってくれた。

かくして挑んだコンクール。めでたく最優秀賞をいただいた。しかし、進んだ四国大会。全くの選外だった。特に戯曲については酷評だった。泣いて泣いて泣きすぎて、どうやって帰ったか覚えていない。

ありがたいことに、部員のみんなはその後も「書いて書いて」と言ってくれた。私も嬉しくて、調子に乗ってまた書いた。

大学でも演劇研究会で演劇を続

けた。こちらは特に大会があるわけでもない。しかし私はまた、何かに負けたくないと思って、戯曲を書いた。

振り返れば、勝ちたいと思った気持ちの正体は、「一番を獲りたい」のではなく、「このメンバーで、誰よりもおもしろい演劇をしたい」ということだったのだと思う。その時、その戯曲を書くのは私でありたい。しかし同時に、私にはおもしろい戯曲を書くための技量が足りない。書きたいものに力が追いついていない。何よりも、部員のみんなが、役者としてもすごい速さで成長している。私の戯曲が足を引っ張っている。

この人たちとずっと演劇をした。高校を、大学を卒業すれば、この演劇の時間は終わってしまうけれど、もしかたいつか、この人

たちと演劇ができたなら？ 私はこのままでいいのか。しかし、どうすればいいのかわからない。我流で戯曲を書くことの限界と、大学を卒業して高知を離れるタイミングが重なった。せっかくだから大阪に行くのだ。修行するしかない。

大阪に移って二年目。縁あって、兵庫県伊丹市にあるアイホールが主催する「伊丹想流私塾」という戯曲塾に通えることとなった。劇作家の北村想塾長、関西で劇作家



ショープロジェクト「花を摘む人」

として活躍する師範たちに戯曲の書き方を学ぶ塾だ。この塾、けっこうスパルタ、だと思う。一か月で五分の短い戯曲を書く。お題が発表され、まず二週間で提出の上、師範にコメントをいただく。その後さらに二週間推敲し、塾長に読んでいただく。それを一年間くりかえし、最後は十分の短編戯曲を卒業公演で上演する。さらに翌年はマスターコースで長編戯曲を一作執筆した。

寝ても覚めても戯曲のことばかり考える二年間だった。苦しかった。けれど、限界を突き付けられる、出口のない苦しみとは全く違った。この苦しみは必ず戯曲を書く力に転化する。確信があった。伊丹想流私塾に通うのと同時期に、私は大阪を拠点に活動する劇団「空の驛舎」に入団した。

空の驛舎は、「リアルに生きる市井の人々にスポットを当て、『個』を描きながら社会を照射する劇世界を会話劇で構築する。」(劇団HPより)、そんな演劇をつくる劇団だ。代表であり、劇作家である中村ケンシの戯曲を主に上

演している。はじめて空の驛舎の演劇を観たときには、人間の呼吸がみえると感じた。確かにそこで、人間が生きている、と。私はこんな演劇を作りたかったのだ。この劇団で、演劇の作り方を学びたい、と思った。

伊丹想流私塾で戯曲の書き方を学んだとすれば、空の驛舎で、人間とは何か、演劇とは何か、戯曲の血肉になるものを教えてもらった。戯曲を書く力を以て、何を描きたいのか。それを掴んでいく時間だった。



空の驛舎「花を摘む人」

この大阪修行での大発見は、「戯曲を書く」という行為そのものがおもしろい、ということだ。かつては、大好きな人たちと演劇をするための手段の一つでしかなかった。それが最高におもしろい遊びに変わった。台詞とト書きだけで人間を、社会をどこまで表現できるか。なんておもしろい、命懸けの遊びなんだ。そんな風に思えるようになった。

二〇二二年の秋、私は「花を摘む人」という長い旅を終えた。

二〇一九年の秋、合同会社ジョープロジェクトの戸根氏からの依頼で、翌年の夏公演のための戯曲を書き始めた。しかし二〇二〇年、コロナ禍が訪れ、公演は先の見えない延期となった。けれど、私は「花を摘む人」という戯曲を書いた。この劇は上演されない、演劇にならないのだ。という後ろ向きな覚悟で、とことん戯曲としてのおもしろさを追い求めた。その戯曲が二〇二一年、関西の戯曲賞であるOMS戯曲賞大賞をいただいた。そして二〇二二年、夏にシヨ

プロジェクトによる「花を摘む人」の高知公演、秋に空の驛舎による「花を摘む人」の大阪公演が実現した。

夢のようなことばかり起きた三年間だった。今まで高知でいたもの、大阪でいたもの、すべてが結実した作品になった。そしてまた、この公演で、たくさんものをいただいた。これが集大成ではない、これから繋がってゆくのだと感じる。やっぱり、演劇はおもしろい。まだまだ書かなければならない。命を懸けて、遊び続けなければならない。

### やまもと あや

一九八八年、日高村生まれ。大阪府在住。「空の驛舎」所属。伊丹想流私塾十七期、同塾マスターコース八期卒業。二〇二二年、「花を摘む人」が第二十八回OMS戯曲賞大賞を受賞。学生時代は高知追手前高校演劇部、高知大学演劇研究会に所属。

# こんな本を売っていいんだろっかという 怖い小説がこの世にはある

山中 由貴

怪談や怖い話が好物なわたし  
が眠れなくなるくらい恐ろしい本  
が発売になった。

沖方<sup>うぶかた</sup>さんの『骨灰<sup>こっばい</sup>』だ。

内容を思い出すだけで、怖い。  
びくびく、ぞわぞわしながらい  
まこれを書いてる。

今回は部屋を暗くして、ひとり  
きりで、この文章を読んでいただ  
けたらと思う……。

ところで沖方さんといえば、  
江戸時代の天文歴史学者、渋川春海  
を書いた『天地明察』で本屋大賞  
を、『光圀伝』で山田風太郎賞を  
受賞するなど、歴史小説作家とし

てよく知られている作家だ。歴史

小説以外にも、SFも書けば、直  
木賞候補作になった『十二人の死  
にたい子どもたち』はミステリー  
という、映画化された作品も多い、  
多方面にわたるヒットメーカーで  
ある。

しかし、ホラーを書く人、とい  
うイメージはまったくなかった。  
それなのに著者初となるホラー  
がまさかこんなに恐いなんて、い  
つたい彼の頭の中はどうなってい  
るのだろう。

東京で大手建設企業に勤める松  
永光弘は、ひとり、渋谷に建設中

である自社の高層ビル地下にある、

工事現場へ向かっていた。投資家  
や株主向けの広報を担当するIR  
(インベスター・リレーションズ)

部で、危機管理チームに所属する  
光弘は、あるツイートの真偽を確  
かめる必要があった。工事現場の

作業員と思われる何者かが数件に  
わたり発信していたのは、地下の  
現場での不審なできごと。「火が  
出た」「人骨が出た」などという  
書き込みとともに貼りつけられた、  
工事現場の現場を写したと思われる  
画像は、ほんとうにこの地下のもの

なのか。本物である場合は現状  
を確認し、対策を講じなければい

けない。ヘッドライトの明りのみ  
で地下深くまでやってきた光弘  
は、壁に大きく書かれた「鎮」の  
文字を見つける。そのそばには図  
面がない地下への入口があり、渋  
谷川が暗渠<sup>あんきょ</sup>となって流れるそのさ  
らに下に、奇妙な空間があったの  
だ。ツイートの画像が現場のもの  
であると確信した光弘が奥へ進む  
と、そこには地面に掘られたよう  
な四角い穴と、祭壇がしつらえら  
れており、穴の底にはなんと、鎖  
に繋がれた謎の男がいた――。

あらずじを書き出しただけのわ  
たしの文章ではとうてい伝わらな  
いのだけれど、ここまでの三十  
ページほどを読んでいただくだけ  
で、作者の筆力がいかに凄いか  
嫌でもわかる。

真つ暗な地下をひとり下つて  
ゆく光弘の心理描写や、なにか  
禍々しいことが待ち構えている気  
配が、これはとんでもないぞと告  
げてくる。そしてもちろん、この  
あまりにも異様なできごととは単  
なる序章、はじまりにすぎないのだ。

そこからの怒涛の展開は、ホラー史上まれにみるスピードで恐怖を突きつけてくる。次から次へと襲いかかってくる。もう無理だ、耐えられないと思っただけを閉じると、今度はすぐにでも読むのを再開しないと気持ちが悪い。とにかく状況が落ち着くところまで読まずにはいられない。ただ、落ち着く場面などいっさいありはしないのだ。わたしは一気に最後まで読むしかなかった。これはもう、言ってしまった方がいいだろう。当然ホラーとしてはめちゃくちゃ怖いけど、それをほるかに上回るほどの小説としてもめちゃくちゃ面白いのだ、と。

まずは主人公の描き方がすごい。光弘は理性的な性格だ。苛立ちや不安をそのまま表に出すことはしない。いったん気持ちを整理して、パニックになつたり感情的にふるまうことをうまく回避するような人間だ。教養ある現代人なら誰でもあれそう対処するだろうという対処ができる人物だから、読ん

でいてストレスの少ないキャラクターだし、理想的ですらある。そんな彼が理性的でいようとすればするほど、こじつけの解釈で安心しようとしたり、形あるものにならずに後戻りできなくなっていく。その人物描写があまりにもリアルで生々しい。

そしてなにより、人びとが絶えず行き交う大都会の地下に得体的にしない空間が広がり、そこにとつともないものが眠っているという想像は、恐ろしさと同時に壮大なロマンを感じさせるのだ。読んでいくとわかるが、その空間には場所としての広がりだけではなく、時間的な積み重ねが堆積している。たとえば幽霊だとか怪奇現象などという言葉そのものが生ぬるいような、いままでのホラーにないほどのスケールの大きさがある。

これまでも日本製のホラー小説の傑作と呼ばれるものはたくさんある。一九九一年に刊行された『リング』（鈴木光司）、一九九七年『黒

い家』（貴志祐介）、二〇一二年『残穢』（小野不由美）、二〇一五年『ぼぎわんが、来る』（澤村伊智）など、ホラー愛好家でない人にも多く知られる傑作はたびたび生まれてきた。『骨灰』は、必ずそれに名を連ねる十年に一度の大作だ。きつと映画化もされるだろう。エンタメとしてこの物語は人びとに消費され、どんどん膨らんでいくに違いない。

わたしは思うのだけれど、そこそがわたしたちの足元に蠢く骨灰の戦略なのかもしれない。とりあえず、なぜだろう、異様にのどが乾く……。



やまなか ゆき

一九八〇年 高知市生まれ。  
TSUTAYA A中万々店の書店員  
なかましんぶん編集長として  
Twitter やってます。  
好きな本について喋るときだけ  
饒舌になります。

# アーティストインレジデンス

岡村 聡徳

令和四年度、高知市文化プラザかるぼーとは改修工事のため休館しています。この休館期間を活用し、高知市文化振興事業団の事業としては新しい試み、アーティストインレジデンスを行っています。

アーティストインレジデンスとは、招聘されたアーティストが一つの地域に一定期間滞在し、創作活動を行うこと、またその活動を支援する制度です。今回は、鏡川をテーマにした写真作品を制作してもらうことで、私たちの身近にある鏡川の魅力を再発見しようと企画しました。

この企画に参加するアーティストについて高知市在住の写真家・中島健藏氏に相談したところ、大阪芸術大学写真学科教授・学科長である織作峰子氏を通じて学生の参加を募ってみてはどうかと縁を繋いでくださいました。織作氏は第七十六回高知県展の写真部門審査員を務めるなど高知に所縁もあることから、それならばと、尤嘉楽さんと原田甲亮さんのお二人を紹介していただきました。

尤さんは中国江蘇省出身の大阪芸術大学大学院修士課程二回生で、中国と日本の似て非なるところに注目した作品や、人々の暮らしに焦点を当てた作

品を主に撮影しています。

原田さんは大阪府出身で、尤さんと同じく大阪芸術大学大学院修士課程二回生です。自然科学に強い興味を持ち、神秘を求めて撮影を行っています。主な作品に、ソラリゼーション(注)を用いたモノクロームの作品があります。

尤さんは九月と十一月にそれぞれ六日間高知に滞在し、撮影を行いました。九月滞在時には、主に鏡川の源流や上流を撮影、土佐山庁舎の近くでは持参していたドローンでの撮影も行いました。ドローンの操縦はスマートフォンで行うことができ、ドローンに搭載しているカメラの映像がスマートフォン画面に映し出されるという優れたものの便利さと初めて見るドローンの俊敏さに驚きました。ドローンでの撮影を続けていると、近所に住んでいるという男性と出合い、男性に事業のことやドローンで空から撮影していることを伝えると「そりゃあすごい。上流にはもつと綺麗なところがいっぱいあるき、そこも撮って帰ってや」と撮影スポットを教えてくださいました。尤さんも「ありがとうございます。たくさん撮って帰ります」と応え、とてもいい雰囲気での撮影ができました。一方、原田さんは九月、十一月と

十二月の三度来高し、撮影を行いました。原田さんは今回の作品制作のひとつに中秋の名月と鏡川を絡めた作品を計画し、九月滞在時にはかるぼーとの屋上で撮影に臨みました。九月十日の天気はいよいよの曇りで月の姿は見えず、次第に雨も降り始めました。二時間ほど粘りましたが天候が回復することとはなく、この日は撮影を断念。翌日の夕方から再びかるぼーとの屋上で撮影。前日ほど雨は降りませんでした。雲は多く月は見えません。そこから待つこと四時間。ついに雲の切れ間から月の姿が。やっと見えた月に原田さんも「待った甲斐がありましたね」と笑顔に。その後も雲が完全に晴れることはありませんでしたが、撮影終了後に原田さんから「こういうった天気でしたか撮れない作品が撮影できてよかったです」と言葉をいただきました。

尤さんと原田さんは他にも山姥の滝や大穴峽、源流憩いの広場など様々な場所を訪れ、撮影を行いました。そして、お二人の作品をお披露目する展示会を、令和五年三月に開催します。大切な水瓶としてはもちろん、泳いだり



かるぼーとの屋上で撮影する原田さん

岸辺を散歩したり釣りをしたりと、市民の皆さんに愛される鏡川。そんな高知市民の川を、お二人がどのようにかメラで切り取り作品にしたのか、ぜひご覧いただきたいと思えます。



ドローンを操作し撮影する尤さん

## ■アーティストインレジデンス作品展

【日時】令和5年3月4日(土)～12日(日)  
10時～17時 ※月曜日は休館  
【会場】藁工ミュージアム、蛸蔵

\*入場無料、無料駐車場あり  
\*詳細は1月末頃に高知市文化振興事業団のホームページ等でお知らせします。

(注) ソラリゼーション  
写真の現像時に露光をある程度過多にすることにより、モノクロの写真作品の白と黒が反転する現象。

# 「アンテナ」 劇団野らぼろ 高知公演

下尾 仁



周波数を合わせば、いろんな人と出会うことができる。アンテナを高くして沢山の人が繋がろう。

『文化高知No.205』で書いた全国を旅するテント芝居の劇団どくんご（以下、どくんご）に参加していた。チャー君から、二〇二二年の春、連絡がきた。今はどくんごを離れ、長野県松本市で劇団野らぼろ（以下、野らぼろ）を立ち上げ、主宰として演劇をやっているとのこと。そして高知で公演をやりたいので、どこかいい場所はないですか？とのことであった。

どんな場所を希望か聞いてみると、野外劇なので公園とか広場で許可が下りる所がいらない。公演はまだ半年ほど先だったので、いい場所を見つけて連絡することになった。

どくんごの高知での公演は、今までは高知城丸ノ内緑地や城西公園などで行っていたが、丸ノ内緑地は現在整備中で使用不可、城西公園は駐車場が無いので、できれば車でも来られる所はないか、友人や知人に当たってみよう。しかし、ここだ！という所が見つからず日は過ぎていったある日、不動産会社に勤めている友人が僕の店にやってきた。経緯を話し、いい場所はないか聞いてみると、卸団地

にある葛屋書店の東側に会社が所有している広い土地があるので、そこを使用したいと言ってくれた。チャー君にも連絡すると、八月末ぐらいに高知に下見に来ることになった。

あつという間に八月になり（前号の文化高知で書いた「流り病」も治り、チャー君と五年ぶりぐらいの再会。その日は公演の成功を願っての歓迎会。僕は嬉しさのあまり酒がすすみ呂律が回らないほどペロペロに酔っ払ってしまった。

次の日、公演候補地の確認に行く前に、せつかく高知にきたので桂浜に行くことに。男ふたり、雄大な太平洋に向い「海のバカヤロー」と叫び、アイスクリンを食べながら候補地に向かった。

候補地に行く途中、海老ノ丸に最近できた大きな温泉施設の前を通り、その広い駐車場が目に入ったので、ここで公演ができないか受付に聞いてみることに。事情を話すと「即答はできないが今外出中の上司に確認してみます」とやさしく話を聞いてくれた。その後、当初の候補地も確認し、チャー君は次の公演地である愛媛の下見に向かった。

それから数日が経ち、チャー君から会場は当初の候補地であった葛屋書店の東側にある広場に決定したと連絡があった。

問い合わせをしていた温泉施設からも駐車場を使用したいと連絡をいただいたらしいが、悩んだ末、温泉施設には断りを入れ、公演場所は決定した。会場が決まり、僕も役割りを果たした感じで少しホッとした。

時は経ち、いよいよ十一月二十日の本番まで一週間と迫ってきたが、週間天気予報は雨とのこと。本番二日前も雨、どうか雨が降りませんようにと神頼みするしかなかった。神に祈りが通じたのか、当日は雨どころか雲ひとつ無い快晴。しかも本番に十一月かと思うほど暖かく絶好の野外劇日和になった。野らぼろは、トラック一台、パン一台に演者四名とスタッフ二名の計六名で長野から高知入り。当日の朝九時半に広場に集合し準備をすると聞いていたので、僕もお手伝い。皆と挨拶を交わしたが、本当にいい人はかりで手伝いをしていても楽しく気持ち良かった。昼過ぎぐらいには準備もだいたいできあがったので、僕は一度家に帰り、打ち上げの準備をすることに。本番は夕方六時半からだが、前座で僕のやっているコミックバンド「年頃男子」も出演することになっていたので、打ち合わせもかねて四時に再び会場に戻る。本番まではまだ二時間半ある。野らぼろのお芝居は入場料なしの投げ銭スタイルだったので、なんとか沢山の人の見ってもらい、多くの投げ銭をと、本番が始まるギリギリの時間まで公演の宣伝をした。

さあ、いよいよ開演。会場は立ち見も出るほどの超満員、感謝感謝である。前座「年頃男子」も会場を温めるパフォーマンスができ、野らぼろにパトントッチ。演者全員が腹の底から張り上げるような

声、なんとも言えない詩的な台詞、奇妙な動きやシンクロナした動き。時に笑い時に考えさせられる内容に、劇団どくんごを彷彿とさせるものを感じ、なんだか懐かしく嬉しくなった。大成功に終わった公演、もちろん打ち上げも大盛り上がり。またしてもペロペロに酔っばらってしまった。次の日の朝、メンバーはわざわざ挨拶に来てくれ、千秋楽の会場である愛媛に向って行った。二日後の千秋楽は雨が降ったらしいが無事終了。全十五回の公演、本当に本当におつかれ様でした。千秋楽を終えた翌日、闘病中であった劇団どくんごの主宰、どいさんが亡くなったとの連絡がきた。チャー君たちの芝居を見届けてから旅立ったのであろうか？どいさんがいなければ出会うこともなかった人たちが、全国にはどくんごから影響を受け、元氣や勇氣をもらい、チャー君のようにどくんごのスタイルを引き継ぎ芝居を続けていく人も多くいると思う。これからもどいさんは野らぼろの活躍を天国から見守っていることであろう。僕も微力ではあるが応援していきたい。

「フレイフレイ野らぼろ」

どいさん、出会ってくれてありがとうございます。どいさんの思いは、生き続けています。

## しもお ひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

# 10~11月の事業から

## トークセッション「高知から発信する音楽表現」と ハナカタマサキコンサート

高知に移住後、精力的な活動を行う音楽家・ハナカタマサキさんのコンサートと「高知から発信する音楽表現」と題したトークセッションを行いました。

十月二十八日（金）に行われたトークセッションにはハナカタさんの他、自らがイベントプロデューサーとなり、さまざまな企画を実践する山下裕矢さん、こ



うち音の文化振興会を組織し、高知の音楽家の育成に尽力する北村真実さんの三名のミュージシャンが登場し、新型コロナウイルス感染拡大以降の活動が制限された中でどのような活動をされたのかやYouTubeやSNSをはじめとする発信方法、「プロ」の定義についてそれぞれが熱く語り、来場者からも「地域の表現者が自分の活動を言葉にする機会は非常に意義がある」という声をいただきました。

十月二十九日（土）のコンサートは舞台がどうやって作られていくか、リハールを公開する企画も実施し、音響を中心とした舞台の仕組みをレクチャーしました。

コンサート本番には満員のお客さまが来場され、先日リリースされたニューアルバムを中心に、ハナカタさん自身が創られた映像も交えた演奏に大きな拍手が送られました。

地域の表現者との連携は、高知市文化



振興事業団としても非常に大事なテーマです。これからは発表の機会だけでなく、活動についてお互いに考える場も作っていききたいと思います。

会場 ミニシアター蛸蔵  
入場者数 トークセッション 二十六名

リハール見学 四名  
コンサート 五十一名

# 高知市文化振興事業団

## 淡路人形浄瑠璃

## 高知公演

歌舞伎や能などと並び日本を代表する伝統芸能のひとつ、人形浄瑠璃。しかし高知県は他の四国三県や関西などと比べ、古くから続く大きな人形芝居の座や専用の劇場などがなく、私たち県民にとって少し馴染みの薄い芸能でもあります。

そんな人形浄瑠璃の中に、五百年以上の歴史を誇る「淡路人形浄瑠璃」があります。国生みの神話が伝わる淡路島で、島民の平穏な暮らしや漁の安全などを祈る神事として、また郷土芸能として発展し、現在は国指定重要無形民俗文化財となっています。全盛期には淡路島に四十以上の座元がありましたが、現在その伝統を受け継ぎ、島で唯一活動を続けているのが、十一月十九日（土）に公演を行った「淡路人形座」です。この日は淡路人形座初の高知での公演という記念すべき日となり、それに花を添えるようにチケットも完売御礼となりました。

拍子木が打たれ、まず始まったのは「戎舞」。釣竿を担いでやってきた戎様が、楽しくお酒を飲みながら舞い踊り、船に乗って鯛を釣りに行くという、祝いの席でも上演される「めでた尽くし」の演目です。途中、「高知の皆様にお会いできたことに感謝して」「コロナが早く収束

することを願って」といった戎様のアドリブや予想以上に大きな鯛が釣り上げられると、会場から大きな拍手が沸き起りました。

次の演目に移る前に人形浄瑠璃の基礎知識を学ぶため、義太夫、三味線、人形遣いについて、それぞれの役割や使っている道具などについてレクチャーを受けました。三者に共通するのは、どうすれば主役である人形たちの魅力を最大限に引き出せるのか、それを常に考えているということ。日々、それぞれの技を磨きながら、座員の皆さんがお互いに高め合って芝居を作り上げている様子がとてもよく伝わりました。

最後の演目は「傾城阿波の鳴門」。生き別れた母と娘が再会するも、罪人である自分が親だと明かせず悲しみ葛藤する母と、



親に会いたい一心でひとり旅をする健気な娘のお話です。この演目は楽しく愉快な「戎舞」と違い、母娘の悲哀を表現するために人形の表情や動きがより繊細です。目の伏せ方、涙のぬぐい方、悲しみで小刻みに震える動きなどは、どれもそれが人形だと忘れるほど。義太夫の語りと三味線がそれらをさらに盛り上げ、見る人の感情を揺さぶります。先ほどの解説で得た知識も活きて、芝居をより深く味わうことができたのではないかと思います。

終演後は戎様がロビーでお客様をお見送り。一緒に記念撮影もできて、最後まで楽しい公演でした。たくさんのお客様から「素晴らしかった」「観に来てよかった」など感想をいただき、座員の皆さんからも「お客様の反応がとても嬉しくて、気持ちよく公演ができました」とおっしゃっていただけましたことは、主催者の私たちにとてもこの上ない喜びです。

人形浄瑠璃をはじめ日本の伝統芸能は、独特の言葉遣いや伝統ゆえの堅さから、難しそうだなと感じてしまう方も多いと聞きます。そのような伝統芸能に気軽に触れ、楽しんでいただけるような事業を今後もぜひ展開していきたいと思えます。

会場 高知市立自由民権記念館・

民権ホール

入場者数

百名

# クリームパンの哀愁



## 風俗歳時記

最近参加した読書会の課題本が『むらさきのスカート』の女』（今村夏子・著）だった。第一六一回芥川賞受賞作である。ユーモアのきいた作品だが読後不思議な余韻が残った。

『むらさきのスカート』の女』と呼ばれる女がいる。いつもむらさきのスカートを穿いているからそう呼ばれる。彼女は毎週公園の奥のベンチに座りクリームパンを食べる。それが彼女にとっての最高の贅沢らしい。定職はなく、ホームレス一歩手前の生活をしている。周りの人々は、異様な女として彼女を見てゐる。けれど、むらさきのスカートの女は、周りの人間がどんな反応を示そうと、決して自分の歩みのペースを変えない。——そういうスタイルを持っている。そんな彼女に強く惹かれる。わたし

が。『わたし』もまた貧困の中を生きながら、『黄色いカーディガンの女』と自称している。『黄色いカーディガンの女』が『むらさきのスカート』によせる一方的でせつない友情が物語の軸である。

読んでいくうちに、子どものころの記憶が蘇ってきた。高度経済成長時代の初期、橋の下で暮らしているぼろを着たお婆さんをよく見かけた。子ども心にも見るのがつらい光景だった。

それとは形は違つが、小説『むらさきのスカート』の女』には、現代的貧困とその中で柔軟に生きる女達が生き生きと描き出されている。

むらさきのスカートの女はいつもむらさきのスカートを穿いている。なぜか？ 他の服を持っていないからだ。黄色いカーディ

ガンの女も同様である。

むらさきのスカートの女は、公園でいつもクリームパンを食べる。どうして、クリームパンなのか。なぜ、あんパンではないのだろうか？ あるいは、なぜクロワッサンサンドやマロンデニッシュではないのか？

クリームパンにはあんパンよりもちよつとだけ洒落た感じがある。あんパンと較べればだけれど……そこにむらさきのスカートの女の『スタイル』がある。けれどクロワッサンサンドやマロンデニッシュのような『高価』なパンには手が出ない。ユーモラスな小説の言外に、かすかな哀愁がただよっている。それが余韻の正体かもしれない。

（本の虫）



## 高知を撮る

第37回写真コンテスト入賞作品

### 祭りの子供達

西岡 季子

（令和2年2月23日 津野町宮谷）

この子供達も大人になったら祭りの担い手になってくれるでしょう。

# 金子三勇士ピアノリサイタル

【日時】3月11日(土)

開場 13:30 開演 14:00

【会場】高知県立美術館ホール

【入場料】全席自由

前売り 一般 1,000円 高校生以下 500円

当日 一般 1,200円 高校生以下 600円

≪特別企画≫

3歳~小学6年生を対象に、50名様を無料ご招待。詳細はHPをご覧ください。

【お申し込み・お問い合わせ】

〒781-9529 高知市九反田 2-1

公益財団法人高知市文化振興事業団

TEL: 088-883-5071



©Seiichi\_Saito

映画『蜜蜂と遠雷』に登場するピアニストの一人、マサル・カルロス・レヴィアノールのピアノ演奏を担当した金子三勇士のピアノリサイタル。幼少期にハンガリーで学んだ稀代の天才ピアニスト、待望の高知公演。

## 風伯

### 異世界時計台

校資料を考える会」の皆さまに感謝。校内がかなりにぎやかだ。時計台の下方に「学園祭」の看板がかかっている。見学会とは関係ないはず。開始前、デジタルの腕時計ばかり気にならない。だが、時計台直下の玄関に入ったとたん、時が止まった。一九三一年に建てられた校舎。十代

その日は急いでいた。午後から仕事があった。午前十時の集合というと、普段なら断るのだが、母校の校史資料の見学会と言われれば、万難を排し参加するしかない。おそらく、二度目のお誘いはないからだ。追手前高校時計台の下に歴史好きが集つ。同窓以外の者が多い。案内の先生とお世話をしてくれた「高知県の学

のころ毎日見なれたはずの重厚な階段は、歴史資料に飾られた異世界になっていた。古写真、古標本など選ばれし学校資料の数々。現存日本最古という校旗の六稜星が輝いて見える。校長室のグラマン機の弾痕。校友会室の建築当時のレトロな窓。そして玄関で垣間見た「創立百四十周年の歴史空間」の階段を夢心地で上る。校史資料室に案内される。明治期からの膨大な資料に圧倒される。写真、紙資料ばかりでなく、「不明」と書かれた実験器具やカワフウソのはく製まであった。時を忘れ、心を奪われた。驚いたことに、私が卒業記念でもらった同じ湯飲みが展示されていた。歴史と人生と時間が、ないまぜになった。見学会終盤、突然と生物室から出る。飛び込んできた昼時の生徒たちの喧騒が、私を異世界から、やっと脱出させてくれた。

(三)

# PLAN 75

それは、75歳から自らの生死を選択できる制度



第199回

市民映画会

2月8日(水)  
2月9日(木)

高知県立美術館ホール

上映時間	PLAN 75
	①10:45 ②15:10 ③19:15
	選ばなかつたみち

【入場料】一枚のチケットで両方の作品まで鑑賞いただけます。  
一般：前売券 1,800円、当日券 1,600円  
割引：1,000円(前売・当日とも)  
※学生証、長寿手帳、障害者手帳等をお持ちの方は割引【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071



### 選ばなかつたみち

© BRITISH BROADCASTING CORPORATION AND THE BRITISH FILM INSTITUTE AND AP (MOLLY) LTD. 2020

## 今号の表紙

うさぎが1、2、3羽

山下 菜々

干支の卯の文字とうさぎをかけたものを表現しました。2羽ではなく卯を合わせて実は3羽いるのがポイントです。背景は梅の色をイメージしました。梅の淡さ、優しさを感じていただければ幸いです。タイトルは私の好きな歌のリズムをオマージュしました。

皆さまにとって、幸せな一年になりますように！

(山下 菜々 / 龍馬デザイン・ビューティ専門学校1年生)

文化高知 No.229 「隔月発行」  
2023年(令和5年) 1月1日発行

公益財団法人 高知市文化振興事業団

〒781-9529 高知市九反田2番1号  
TEL 088-8831071 郵便番号01680-5114869



**THE MONEY MAN**

一ツメー・ホー・キ・文・舞・団

作=モリエール 翻訳=秋山伸子 演出=シルヴァイオ・プルカレーテ

県民文化ホール・オレンジホール 2023/1/14(土)

加治裕樹  
村内将人  
大西礼寿  
大野はな  
荒井大祐子  
新井優希  
長谷川朝晴  
阿部麻由  
平塚七緒  
藤野 暁彦

演出 佐々木蔵之介

主催 公益財団法人  
高知市文化振興事業団  
KUTVテレビ高知  
後援 在日ルーマニア大使館  
企画制作 東京芸術劇場  
<https://www.purcarete-fes.jp/>

